
夜空に散る花、咲いた花

夕月日暮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空に散る花、咲いた花

【Zコード】

Z9907C

【作者名】

夕月日暮

【あらすじ】

田舎で暮らす少年富岸優作は、クラスメートの城戸やとりから花火大会へと誘われる。しかし彼の中には、花火に対する苦い思いがあり。

プロローグ

何年も前に、一度だけ花火を見に行つた。
妹がどうしても見たいと言つていたからだ。
当時、俺たち家族は田舎の山奥に暮らしていた。
ふもとの町まで車で30分くらいだったと思う。
俺は学校に自転車で2時間かけて通つていた。
それまでは都会暮らしをしていたからか、最初は辛かつた。
なんでこんな生活しなきやならないんだ、と両親に愚痴をこぼしたものもある。

おかげで体力だけはついた。

そんな生活に慣れてきたのが、7月の終わり頃。

ちょうど今と同じ頃だ。

この時期になると、どうも昔を思い出してしまつ。
今いる自分は偽者で、本物はあの夏の夜に置き忘れてしまつたか
のようだ。

事実そうなのだろう。

たまに、自分のことを客観的に見て、『俺』の存在を感じること
がある。

その“俺”はいつも俺に非難がましい視線を向けてくるのだ。

なにも知らない残響の分際で。

他人ではなく、それが自分自身だからこそ。

不躾な視線を送る“俺”への苛立ちは、際限なく増していく。

夏はこれだから嫌だった。

暑いのも嫌だし、蚊が鬱陶しいのも嫌だ。

しかしながら、より嫌だったのは、あの花火の夜を思い出すことだった。

1 / 富岸 優作

「花火大会さ、今度みんなで行かない？」

そんな会話が聞こえた、夏の教室。

期末テストが終わり、あとはテストの返却と終業式くらい。そうなると学生たちは、今までテストによつて抑えられていたパワーを一気に開放する。

若さつていいねえ、と思つ俺は親父くさいのだろうか。彼らはみんな、俺の友人たちだ。

こちらに引つ越してきて以来の付き合いになる奴も、何人かいる。普段はお互い馬鹿を言い合つたりくだらない話をしたりもするのだが、今回なぜか誰も俺に話しかけようとはしない。

それは別に俺が彼らと喧嘩中だとか、そういうわけではない。

みんな良い奴だから、俺に気を使つているだけなのだ。

それに一抹の寂しさを覚えたとしても、俺は、文句を言えない。きっと声をかけられたら、俺は彼らにトンデモナイコトを言つてしまいそうだから。

みんなが俺に気を使つているというのは、どこか気まずい。人のためを思つてやつていることなのに、どうにもうまくいかないことがある。

これも、そういうコトの1つなのだろう。とにかく、長居はしないことだ。

これ以上、彼らに気を使わせてばかりじゃいけない。

「悪い、ちょっと今日用事あるから」

「おー、そうか。じゃあな」

「テスト、今回は負けないからなー」

「ははっ、俺に勝とうなど10年以上早いわ」

そんな言葉を相手と交わしあいながら、俺は1人教室を出た。

出る際に戸を閉める。

それだけで教室の中にいるみんなとの間に、境界線が引かれたような気がした。

一步、二歩と教室から離れると、次第にその思いは強まっていく。

「孤独、だな」

人付き合いは、それなりに考えながらやつてている。

俺の数少ない自慢は、喧嘩した回数が0、ということだ。暴力沙汰だけではなく、激しい口論、トラブルなど、不穏な空気を対人関係で発生させたことがない。

俺は他人が好きだったから。

その理由はとても陳腐で、どうしようもないようなコトだつたけど。

それでも好きだったから、誰も傷つけないようにしてきた。

「でも、正直しんどいなあ」

「何がしんどいのだ、優作」

「どうわつー?」

突如、俺の背後から女の声が聞こえた。

気配を全く感じさせない、凜とした女生徒。

彼女の名は城戸さとり。

俺とはクラスメートであると同時に、一つ屋根の下に住むという間柄である。

……誤解のないように言つておくと、俺と彼女は別段周囲が怪しかるような関係ではない。

彼女の家はお寺で、俺はその居候。

俺のほかにも、数人そんな境遇の人たちがいる。

「急に声をかけるな、驚くだろつ」

「いい加減お前も気配察知能力を向上すべきだと思つぞ」

「なんで現代社会に暮らす平凡な学生がそんな能力鍛えなきゃいけないんだ？」

疑問はつきない。

ここ数年、他の友人たちよりも深い付き合いになるが、さとりのことはいまだによく分からない。

人間関係に細心の注意を払うようになつてから、俺は人を見る目、とこうやつを鍛えた。

ちょっととした仕草から相手が何を望んでいるかが分かるようになり、俺は気の利くやつとして有名になつていた。

それでも、さとりのことはどうにも読めない。

結構美人だし、黙つていれば深窓の令嬢に見えなくもない。

だと言うのに、なぜか男言葉。

しかも趣味は武道全般で、俺なんかは一度も勝つたことがない。こんな田舎でどうやってそんなに多種多様の武道を学べるのか、と以前聞いてみたところ、

「通信教育でな」

などとこう返事があつた。

きつと深く考へても、仕方がない。

とにかく、城戸さとりはそういう少女だ。

「で、なにか用か？」

「ああ、そうだ。テストも終わつたことだし、今度遊びにでも行かないか？」

「別にいいけど」

しかし、この周辺に遊べる場所など存在しない。

ゲームセンターもなければ映画館もない。

野山を駆け回れと言つならいくらでも場所はあるが、学生が遊びに行くようなところなど、皆田検討がつかなかつた。

「どこに行くんだ？」 こゝらじや遊びどころもないだらつ

「花火大会だ」

と。

そこで、俺の一一番聞きたくない単語が、飛び出してきた。

「花火大会、ね 」

やばい。

つい口調に棘が入ってしまった。

抑えろよ、俺。

さとりだつて悪意を持つて言つてきたわけじゃない。
別にお前が怒る理由なんかないだろうが ！

「……また、1人で葛藤しているな」

俺が黙つていると、さとりは静かにそう言つた。
顔が険しい。

あれは不機嫌なときの表情だ。

「葛藤なんか、してないけど」

「では行くか、花火大会」

「 悪い」

俺は若干ためらいながらも、さとりの誘いを断わつた。
ためらつたのは、さとりに悪いと思ったからだ。

花火を見に行くつもりなど、最初からこれっぽっちもない。

「誘うなら俺なんかよりも、もつと良い奴ならいくらでもいるだろ
うに。お前だつて顔広いんだから、一緒に行く友達くらいいるだろ
う？」

「例年ならば、な。今年はお前と行こうと思っていた」

「残念ながら俺は花火恐怖症なの。よつて行けません
嘘ではない。

俺は花火が嫌いだが、それ以上に恐ろしかつた。

あの黒い空に突如現れた無数の閃光。

まるで未知の侵略のような感じがして、ひどく不気味だつた。

最初は、そんな風に思つてなかつたはずなんだが……時が経つに
つれ、人の中でイメージは変わっていくものだ。

それだけのことだろう。

「それじゃ、先に帰つてる。会の仕事、頑張れよ」

さとりは生徒会に所属しているため、帰りは俺の方が早い。
少し前までは俺も部活動をやっていたため、一緒に帰ることもたまにはあった。

が、俺たち野球部は見事一回戦敗退。
かくして俺はこの間引退したというわけだった。

「優作」

「なんだ？」

歩み去ろうとした矢先、背中の方からさとりが声をかけてくる。
「行きくなつたら、私に言え。予定は空けておく」

「……分かつた」

行くつもりなどない。

だから他の奴と行つておけ、と言つべきなのだろう。

それでも、さとりの目が真剣だつたから。

俺は、氣まずい気持ちを抱えたまま、足早に学校から立ち去つた。

2 / 城戸さとり

「困つたものだな、あいつも」

足早に去つていつた幼馴染を見送りながら、私はため息をついた。
あのままではよくない。

そう考えたのは私の意志で、これはあいつにとつてお節介にしかならないかもしない。

それでも、あいつは変わるべきだと思つ。
きっかけは花火だつた。

10年前にあつた、普通の花火大会。
そこで、ある事故が起こつた。

当時6歳だつた、宮岸優子の死。

優子は病弱だった。

私と優子は友達だったが、会つ場所は決まって彼女の部屋の中。子供の頃だつたから私もよく分からなかつたのだが、重い病気だつたらしい。

もともと、富岸一家は優子の療養のために、こんな田舎へと越してきたのだ。

都会の空氣は、彼女の身体に毒だつたらしい。

彼女はあまり動くこともできず、いつもベッドの上にいた。

私が自分の経験を話すと、優子はいつも羨ましい、と笑っていた。それがひどく寂しそうな笑みだつたから、私は今でもよく覚えている。

優子の部屋から見える風景は、自然に満ちていた。

静かな山と、そこに生えわたる木々の群れ。

そしてどこまでも広がっていく青空。

自然はいいものだと言つ人もいるが、私は必ずしもそうではないと思う。

優子のように、自然の風景しか見ることができない環境に置かれたらどうなるだろう。

大地は広く、大きく、そして 変わらない。

人にとって変わらないということは、停滞。無に近いものを、感じさせるのではないだろうか。

自然破壊に繋がると分かつていても、人が人工物を次々と生み出していくのは、実感したいからだろう。

俺たち人間はここにいる、という確かな意思表示。

無の中において必死に有を叫ぶ、人の性。

優子の中にも、そういう想いがあつたのだろう。

彼女は花火が見たいと言つた。

変わらない景色と、僅かな人々との触れ合い。

それだけでは、足りなかつた。

生きている実感を得るために、優子は求めたのだ。

季節は夏。

ちょうど今と同じ、7月の終わり頃。

私は彼女に頼まれたとき、その願望を拒否してしまった。周囲の、特に彼女の両親から、優子を外に出さないよう言われていたからだ。

私は頭が固かった。

規則を破る連中は許せなかつたし、大人の言いつけは必ず守るべきものだと思っていた。

だから、優子に対し「それは駄目だよ」と、そんな言葉しか送れなかつたのだ。

そのときの優子の顔は、今にも泣き出しそうでいて、それでも笑おうとしているような、今思い出しても悲痛さに胸が痛むようなものだつた。

あの顔を思い出すたびに、私は後悔する。連れて行つてやれば、よかつたんだ、と。

だつて、それが最後に見た優子の姿だつたから。

そんな辛い顔が最後の別れだつたなんて、あまりにも哀し過ぎる。

……後日、優子は死んだ。

原因は、兄貴である優作が外に連れ出したから。まさか、と思う。

当時8歳だつた少年が、妹を連れて隣町まで行つたとは。

両親の目を搔い潜るために、自転車などは一切用いなかつたらし

い。

歩いて、遙か先にあるはずの、夢の舞台を手指したのだ。

それは、幼い兄妹にとつてどれだけの冒険だつたのだろう。

そんな夢のような一夜の結末は、ひどく現実的だつた。

優香の命は散り、後悔という花が咲いた。

優作は両親から散々責められたらし。

無理矢理優子を連れ出したとか、いらぬ誤解をうけたこともあるのだろう。

それ以降、富岸家は崩壊の一途を辿った。

母親が一方的に実家へと戻り、父親も浮気相手の女と同棲を始めた。

そのことから村での評判が悪くなり、父親は愛人と共に逃げた。その際に、優作は家へと預けられた。優作が父親やその愛人から疎まれ、嫌われているのは子供の私も十分分かった。

そんな環境に、あいつをやつておくことは嫌だった。

あいつは勇気を出して、私が踏み出せなかつた一步を越えた奴だつたから。

例えその結果が優子の死であつても、責任は優作だけにあるわけじゃない。

なにより、優子がそれを求めた。

あいつはそれに応えたのだ。

私には正直それが羨ましい。

それだけ富岸優作は、綺麗な心の持ち主なのだろう。

綺麗過ぎて、ひどく脆い。

優子の死の責任を、あいつは全て背負つていて。

周囲がそう仕向けてることもあるだろうが、本人の性質によるところ大きい。

ともあれ、あいつは亀裂の走ったガラスのような存在だ。

そろそろ、誰かが修復してやらなければならぬ。

空いた領域に触れることになろうとも、だ。

俺はずっと縛られ続けている。

あの花火の夜からずっと。

なにをそこまで迷う必要があるのだろうか。

今の俺は自分を偽つてばかりだ。

皆と仲良くなつて、好青年を気取つたところにどうするつもりなのだろう。

そうすることで優子の死が消えるわけではないといつに。

過ぎ去つた過去はどうにもならない。

優子の死は悲しき事実として既に刻まれている。

そのことで家庭が崩壊したのも、また然り。

俺はどうやらそれに立ち向かうことが出来ずにはいるらしい。

花火大会という、それだけのものにあそこまで怯えているのが証拠だ。

全く 不様極まりない。

行いを正せば、きっと懐かしい日々が蘇つてくる。

どこかで無意識にそう期待しているからこそ、俺は花火という象徴を拒絶し、必死に“良い子”で在り続けようとしている。

なんて愚かな、幻想。

そんなことぐらいで悩むなら、もう一度見に行けば良い。

花火大会へ。

あのときとは違う、花火大会へ。

花火はいい。

優子が見たがつていただけのことはある。

あの夜、息を荒くしながらも、優子と2人で夢中になつて見た。

2人は長い距離を歩いて行つた。

その先にあつた花火は、たつた1つの巨大な幻想。

儂くも素晴らしい、2人が求めた幻想。

そこを俺は分かつてているのだろうか。

俺が今を否定し、家族と共にあつた日々を夢見るというのならば。

優子の求めたものまで否定してしまうことになる。

当日になつた。

俺は受験生といふこともあつて勉強漬けの日々。宛がわれた部屋で机に向かつてゐるだけの生活。さすがにちょっと疲れてきた。

うーん、と背を伸ばしてから、ようやく今日が花火大会の日だということを思い出した。

「さとり、もう行ったのかな」

なんとなく気になつて、呟いてみる。

返事など当然ない。

窓の外を見やると、陽が少し沈んでいる。

隣町への花火大会へ出発するなら、そろそろ出発しないと間に合はない。

この町には駅というものがない。バスもない。

そのため近隣の町へと出向くには、自家用車かタクシーの呼び出しが必要となる。

自転車でも行けることは行けるが、坂道が多いため非常に疲れる。歩いていくなど論外だった。

その論外を、かつての俺はやつてしまつたわけだが。常識的には考えられない。

我ながら どうしようもなく、馬鹿だった。

「いかんいかん、雑念消去！」

「優作君」

「どうわつ！？」

唐突に背後から声をかけられ、俺は椅子から飛び上がりそうになつた。

振り向くとそこには、穏やかな顔をしたおじさんが立っていた。

この寺の住職にしてさとりの父親、影義さんだ。

今となつては俺の保護者 父親代わりの人でもある。

しかし、気配を断つて背後に立つのは娘さん共々止めていただきたい。

「僕ら、そろそろ花火大会に行こうと思つてるんだけど、どうかな？」

「お断りします」

「まあそう言わずに」

がしつと肩を掴んでくる。

温厚な顔立ちのせいで時折忘れそうになるが、この人はさとりの父親だ。

戦う住職という肩書きが似合いそなぐらいの実力者である。肩を掴まれた以上、俺では引き離せそうもない。

「いや、俺はいっすから」

「最後の夏、思い出作ろうじやないか」

ぴたりと、俺は動きを止めた。

そう、これが最後の夏。

俺の志望大学は、東京の私立大学。

大学卒業後にはそのまま自立するつもりでいたから、この町にはもう戻つてこないかもしない。

だから、これが最後の夏。

そのことを改めて言葉に出されると、不思議と寂しさがこみ上げてくる。

夏は卑怯な季節だと思つ。

最後の夏という言葉の響きには、他の季節にはない何かがあるのではないかだろうか。

だからか、つい不貞腐れたような声で、言つてしまつた。

「……行くだけなら」

「ありがと。さとりもきっと喜ぶよ」

そう言い残して、影義さんは去つていった。

俺も準備をして行かなければならない。

机の上を見ると、そこには参考書が山積みになっていた。

勉強から逃げる、ということになるのだろうか。

今まで花火から勉強へと逃げ続けていた俺が、今気まぐれとは言え、全く逆の選択をしてしまった。

どちらにしろ逃げなのだろう。

俺の人生は逃げ道だらけだ。

けど、逃げ道の先にも、何かがあるかもしれない。

そんな期待が、ないわけではなかつた。

5／花火大会

影義さんの運転する車に乗つて移動する間、窓の外をじつと見ていた。

あの道を、幼き日の俺は歩いていた。

途中で妹が立ち上がりなくなるほど疲労したため、おんぶしてやりながら進んだ。

懐かしさと腹立しさと、どうしようもない寂しさが胸の中に湧き上がる。

「優子は、楽しそうだったか？」

そんなことを考えている俺に気づいていたのだろう。

さとりが静かに尋ねてきた。

「ああ……楽しそうだった」

顔色はとても悪かつた。

息も荒かつたし、汗もたくさんかいていた。まともに立つことも難しいという状態だった。

でも、笑つていた。

辛そうだったが、弱音は吐かなかつた。

むしろ初めて見る世界に、心を躍らせているようだつた。

「そりゃ

さとりは俺の言葉に頷き、肩を叩いてきた。

「それだけで十分だ。お前は正しいことをしたよ」

「慰めのつもりなら、遠慮してくれよ」

「慰めなど私が言うものか。確かにお前は間違つたことをした。けどな、同時に正しいこともしたんだ」

「よく、分からないな」

「……分かりやすく言うとな。私はお前の決意を羨ましく思つ

「それだけを告げて、さとりは黙つた。

言いたいことは、実は分からなくもない。

ただ俺本人がそれをすると、醜い自己弁護になつてしまつのはないが、という気もするのだ。

だから俺は自分と、あの夜脳裏に焼きついた花火が嫌いだ。

けど、さとりの言葉は嬉しくもある。

矛盾、してるんだろうか。

「ほら、着いたよ」

物思いに耽つていると、既に影義さんは運転席から降りていた。

遠くに見えるのは砂浜。

周囲は薄暗くなりつつあるといつのに、人の気配によつて埋め尽くされている。

塩の匂いが風と共にやつてきて、山暮らしに慣れた俺には斬新なものを感じさせる。

車から出ると、夏の夜特有の暑さが感じられた。

海の雰囲気、祭りの雰囲気と相まって、これから何かが起きることを予想させる空氣である。

波の音も人々の喧騒に掩き消されてよく聞こえない。

「なにをしている、わざわざシートを持って座席確保に向かつぞ」

「あ、ああ」

さとりにシートと水筒、その他諸々の小道具を持たされて、砂浜へと近づく。

屋台もいくつか立ち並んでおり、楽しそうに駆け回る子供たちの姿が目に入った。

その姿が、不意に昔の優子と重なる。

「……っ

思わず後退りをすると、さとりにぶつかった。

射殺されかねないほどの視線で睨まれる。

正直、ものすごく怖い。

「いや、悪い」

「全くお前は……いつまでもぼーっとするなー。早くしないと始まるぞ」

その言葉に、慌てて俺は手近なところにシートを敷いた。シートの上に荷物を乗せて、俺とさとりは腰を下ろす。

影義さんはと言つと、財布を片手に屋台の方へと歩いていく。多分なにか変なものを買ってくるんだろう。

あの人は妙なところで子供だから。

「父は相変わらずだ」

さとりもそんな影義さんには手を焼いているらしい。が、そこが影義さんの長所のような気もする。

一緒にいると、純粹な心を取り戻せそうな人だ。

「俺も、あんな風な大人になりたいもんだよ」

「無理だな、お前と父は正反対だ」

影義さんは子供のような大人。

俺は大人のような子供だと、さとりは言つ。なるほど、それは確かに正論かもしれない。それに。

「お前…………せつかぐの花火が始まっているのに、まるで気にしないんだからな」

そう。

既に夜空は、脆く儂い花によつて彩られている。

一夜限りの、広大な花畠。

綺麗で、どこか悲しい。

あの花火を見ると、優子を思い出す。

罪悪感と優子の笑顔の双方が、俺といつ一個の存在の中溶け合つていく。

「じちや混ぜになつた価値観は定められし方向を見失い、やがて霧散する。

だから、俺は花火に対して何を感じることも出来ない。

あまりに多くのものを感じすぎて、訳が分からなくなつていた。

「もつと純粹な目で見てみる、子供のような心でな」

「俺、もう子供じゃないんだけど」

「馬鹿者、周囲を見てみろ」

言われたとおり、視線を巡らせてみる。

感心したような声と、花火によつて一瞬だけ映し出された笑顔が見えた。

それは、俺なんかよりもずっと年上の、おじさんおばさんたちだつた。

「花火、誰が考え出したものかは知らないが……良い物だと思わないか?」

「……どうかな」

認めたくない。

だから、そんな風に返答する。

頭の中は「じちや」「じちや」だ。

まるで整理しきれていない状態では、良い物も良いと思えるはずがない。

「確かに派手だし綺麗だけじさ。すぐに散るなんて、悲しいじゃないか」

それは優子の笑顔のようだ。

優子はたった一度の笑顔を見せて、すぐに散った。

俺は、それを悲しいと感じたんだ。

「どうか、お前にはそう見えるか」

さとりは、どこか物憂げな様子で俺を見た。

花火がさとりの顔を照らし出す。

なんだかとても幻想的で 綺麗に見えた。

「私にはな、あれは咲いているように見えるぞ」

滅多に見せない、笑顔を見せて、そう言い切った。

「見えなくなるだけだ。咲くときに精一杯力を使つたから、あとは

夜空の中で静かにおやすみ、というわけだ」

「……意外だな、さとりってロマンチスト?」

「いや。ただ、こんな幻想的な光景を見せられては、自然とそう思つてしまふだけだ」

「なるほどね」

さとりは視線を前方に戻した。

花火が咲き続けている。

なるほど、散り続けていると考えるよりはよほどいい。

どころか、一層綺麗なものに見えた。

「優子はさ

「む?」

「散つたのか、咲いたのか。俺、ずっと前者だと思ってたけど……後者だつたのかな」

「……そうだな」

優しげな声で、さとりは俺の頭に手を乗せた。

「きっと、そうだ」

俺は、嬉しかった。

花火は咲き続けていく。

周囲は幻想に包まれて。

どーんと、大きな音がした。

「おお、優作！ 今のはすこかつたな」
「はは、そうだな。今のはでつかい花が咲いた」
簡単には散らないだろ？
こんなにも綺麗に花火を見ることができるとは、思つてもみなかつた。

6 / “富岸優作”

夢が高らかに咲き続ける。
俺もどうやらそこに気づいたらしい。
だから言つたろう、花火は良い物だつて。
ああ だからそろそろ、残響たる“俺”は散るべきかもしれない。
俺が新しい花を咲かせるには、今ある“俺”は邪魔みたいだ。
優子。

夏の夜、一夜限りの夢の楽園。

お前が見た夢も、きっと綺麗だつたんだろうな

Hピローグ／城戸さとり

私は父の車に乗せられて、隣町まで来ていた。
あれから一年。
私は今年が正念場だ。

奴とは別の、それでもこの町ではない遠くの大学を目指す。つまるところ、忙しい。

そんな受験生であるはずの私は、なぜか駅のホームで20分以上待たされている。

どうも電車が事故にあつて遅れているらしい。

ようやく、アナウンスが電車到着の旨を告げた。視線をやると、はるか彼方に黒い影が見えた。

その影 電車はやがて駅へと接近し、やがて停まった。

ふしゅー、という気の抜けるような音と共に、扉が開かれる。

中から1人だけ人の良さそうな男が、ひょっこりと荷物を持つて現れた。

私は耐え切れず、そいつの胸に飛び込んで……

「遅いわアホタレッ！」

「ぐぶおつ！？」

我ながら見事なアツパーをお見舞いしてやつた。

弧を描いてそいつが地に落ちると同時に、電車は駅から離れていく。

が、そんなものは私には関係がない。

「お前が『最後の思い出に』と誘つておいたんだろう！ それを、お前の方が遅刻して、どうするつ！」

「あ、アイムソーリー！ ソーリイイイ！」

なんだか本当に苦しそうだったので、手を離してやつた。考えてみれば電車が遅れたのは別段こいつのせいではない。つまりこいつは別に悪くはない。

「……すまん、ちょっとやり過ぎた」

「あ、ああ……久々の一撃だとキツイぞ」

そう言って、奴 宮岸優作は、笑つて立ち上がった。

「しかし去年までのお前からは想像もつかんな、花火大会に行こうなどと」

「変か？」

「いや、実に結構。しかしなぜ私なのだ？」

「ん、別に。お前となら楽しく見れるかな、と思つてな」
なぜか明後日の方を向きながら優作は答えた。

なにか隠しているな、こいつ。

「ふむ……そうか、嬉しいことだ。つと、そろそろ行かないと始まるぞ」

腕時計に記された時刻を確認すると、もうあまり時間がなかつた。
私は早足で駅のホームから出る。

その折、後ろから優作の呟き声が聞こえた。

「言えないよなあ、花火見てるときのあいつがすげく綺麗に見えた、
なんて。バカツブルじやあるまいし」

。 。 。 。 。 。

「悪い、待たせた。つてどうした、顔真っ赤だぞ」

「黙れキザ男」

「は？」

「いい、聞くな、問うな、何も話すな！ 私は先に行くぞ！」

「あ、ちょっと……お前、まさか聞いてたな！？」

「何も聞くなど言つただろうがこの馬鹿者があつ！」

なんだか。

去年の花火大会は、優作の奴に妙な感情まで咲かせてしまつたら
しい。

「……今年はどうなるのだろう。

少々不安だ。

まあ、それでも。

楽しみな気がしなくも、ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9907c/>

夜空に散る花、咲いた花

2010年10月8日15時52分発行